

---

---

## ● 四 国

### 岸 啓 子

---

都会と地方の格差が拡大する中、大都市間のリニア新幹線着工とは裏腹に、四国の鉄道は未だ単線のまま、昭和の時代に語られた新幹線計画も立ち消えになってしまった。経済的地盤沈下が止まらぬ四国では、内外の一流演奏家のツアーは減少し続けている。しかしそれが音楽の停滞に直結しているわけではない。世界的演奏家と地元演奏家の共演、市民参加型コンサート、子供を対象とした教育的な音楽活動など、目的と在り方を明確にしたコンサートは手作り感を強めつつ重要性をましている。

2014年は第3回高松国際ピアノコンクールが開催され、ムン・ジョンが優勝した。ムン・ジョンは本コンクール初のアジア人・女性・十代の優勝者であり、更に同年12月にジュネーブ国際音楽コンクールピアノ部門で1位を獲得した。コンクール委嘱作品（第3次審査曲）藪田翔一作曲『瀬戸内海』は、瀬戸内海国立公園指定80年を記念したものであり、香川フェスティバルにおいても使用された。ムン・ジョンは優勝記念コンサートで瀬戸フィルハーモニーと協演し、第4位のアンナ・ツイブレは高松交響楽団（定期演奏会 指揮：平井秀明）協演した。第2回優勝者アレクサンドル・ヤコブレフもリサイタル（ラヴェルほか）を開くなど、コンクール関連のコンサートが音楽シーンを大いに活気づけた。このコンクールは第一次審査から本選までの全ての参加者の演奏をYouTubeで聴くことが可能で、運営関係者の努力が偲ばれる。

四国唯一のプロ・オーケストラである瀬戸フィルハーモニーは上のコンクールにおいて協奏オーケストラを務め前回より評価を高めたが、秋には小林研一郎を指揮者に迎え、チャイコフスキープログラム（Vl.ユーリア・イゴリーナ）を熱演した。更に、年数回のデリバリーコンサート、美術館エントランスコンサートへの参加など、香川の音楽の多様な場面に大いに貢献した。愛媛交響楽団（第41回定期 指揮：鈴木隆太、第42回指揮：上野正博 モーツァルト ホルン協奏曲4番抜粋ほかHr：今井仁志）、徳島交響楽団（第43回定期 指揮：國分誠 Vc.遠藤真理）、高知交響楽団（第152・153回定期 指揮：高橋敏仁）は安定した実力を保っている。地元には定期演奏会を待ち焦がれる熱心なファンも多いのである。ベートーヴェンの交響曲連続演奏プロジェクト進行中の高知交響楽団は今年第4番・第5番を演奏した。

四国二期会は設立30年を期に活動の盛り上がりを見せた。記念行事開催年は支部ごとにバラつきがあるものの、高松支部は第40回記念演奏会として『魔笛』（日本語上演）を高松と松山で上演、徳島支部は『平井康三郎の世界』を開催、平井康三郎の歌曲、平井秀明のオペラ『小町百年の恋』の抜粋曲によるプログラムを組んだ。また、高松市では2つの新作オペラ初演があった。『扇の的〜ここから始まる』（作曲：田中久美子 作詞：山本恵三 音楽監督：大山晃 葵：谷原・岸上 那須与一：若井健司 二位：渡辺・漆原）はアルファあなぶきホール設立10周年記念事業として一般公募から練り上げられた企画の成果であり、大山晃作曲『シェイクスピアの情景』はむしろ氏の多彩な音楽活動の中から自然発生的に誕生した演奏会形式による小

オペラである。四国の地方都市で複数の新作オペラが上演されるのはまれに見る快挙と言える。オペラ徳島は『トゥーランドット』（指揮：山上純司 演出：松本憲治 姫：平野雅世 カラフ：藤田卓也）を上演した。

松山バツハ合唱団はヘンデルの『メサイヤ』（指揮：橋本眞行 当日振替）をフライブルクバツハ合唱団と合同演奏し、高知バツハカンタータフェライン（小原浄二主宰）はバツハのカンタータと併せてブランデンブルグ協奏曲第6番を、コレギウム・ムジクム高松（大山晃主宰）は生誕300年記念としてC.P.E.バツハの作品を取り上げた。

地元密着型の優れた吹奏楽団も四国の特徴であるが、数が多いため、名前をあげることができないのが残念である。